

## 続ボラッチョ・;ボニートのメキシコ便り(No.40)

### 「じっと我慢の子であった」

・・・発車オーライ(3)・・・

次なる登場は、見た目は2両連結の大型バス・・・メロバスである。このバスは市内の主要な道路の一つで、南北に貫いている、インスルヘンテス通りを運行する路線と、それに直行する形で東西に走る2路線がある。

警備の警官が一人だけ常駐している、立派な駅舎があり、メロバス専用の走行道路を、たとえ道路がどんなに混雑していても、その渋滞に巻き込まれている他の多くの車を横目にみですいすい走っていく。



このメロバスは6年ほど前に出来たシステムで、後から開通した東西の路線とも、どれも車体は清潔で、駅間も短く、地上を走るので開放感があり、安心感も地下鉄より高いと言える。このバスに乗るためには、メロバスカードが必要で、カード自動券売機でこれを買って、チャージして、あとは改札でタッチ&ゴーするだけである。

このような交通機関がもう少し発展し便利になれば、メキシコ市内の交通渋滞と、それに伴う排気ガスなどの環境対策の一つの解決策になるのだろう。

もっとも個の確立しているメキシコ人にとっては、公共交通機関を利用するより、マイカーを持つ方がステイタスにもなり、ここでも前回の便りにも書いた通り、「鶏と卵の論理」が顔を出しそうである。

さて、カードを改札の入場システムにかざししばらく乗ってみよう。ちなみに、メロバスはどこまで行っても5ペソ(約55円)である。見た目の客層は、他の公共交通機関のそれと比較してよいと思っているが、当方が感じた各交通機関共通している、乗客心理がある。

とにかく、こちらの人は、老若男女を問わず、乗り物の席取りに関する執念は相当なものと思える。たとえ一駅でも、座ろうとして、少しでもあいていれば、巨体をねじりこんでくる。

また多くの人は座っている人の真ん前でなく、座っている人と人の間に立ち、掴り棒に両手を広げて持つ人が多い。確かに1対1の人間を相手にするよりは、1対2の方が座る確率が高いし、ボックススタイルの座席なら、1対4となり、等比級数的に確率が高まり、金輪際その位置から動かないぞと言う執念が感じられる。

私が、最近経験したこれに関する出来事から。

その1 : 私の前に5、6歳くらいの子を連れた30代の女性が乗ってきた。子ども「座りたいよ・・・」(母親にせがんで今にも泣き出しそう)。母親「駄目！このおじさんが席を譲ってくれないから」(はっきり言った)、子ども「なおもせがむ」、母親同じ事を繰り返して子どもをなだめる。

何と、二つ目の駅で二人とも降りた。(この間、5分くらい)(他人が席を譲らないことを非難して子どもに言う前に、何故母親は、「降りる駅も近いのだから、我慢なさい！」と教育的指導をしないのだろうか。)



車内にある路線案内図、地名とシンボル図で描かれている

その2 : 30代半ばの女性が、私が座っている斜め前に乗ってきて、私の肩を叩き席を譲れというのだ。自分の前の座席に若者がいるのに。ボラッチョ・ボニート氏とて老いぼれたとはいえ、男の矜持を持っているので、席を譲ろうとしたが、ちょっと逡巡したところ、再度肩を叩かれ同じ事を言われてしまった。

このときさすがの紳士の私？も一瞬、アドレナリンが全身を駆け巡ったが、ぐっとこらえて、にこりと笑いかえ



した。彼女は結局2つ先の駅で降りた。(何故若者に声をかけず、年寄りの私に声をかけたのかわからない。考えたくないが、潜在的な東洋人蔑視感情？あるいは席を変えてくれるだろう紳士と見て？)

その3 : 40代半ばの中年おばさんが、下を向いていた私の肩を叩いて席を譲れという。当方がその方を見たところ、「すみません」と言いながら、それ以上何も言わなかった。当方が顔を上げたところ、多分余りにも老い顔、疲れ顔だと感じ、これはまずいと思ったのだろう。(謝ったのは、さすがは年の功？)

客に三つの題を出させて、その場で一席の落語にする、落語の3題漸では、見事な「落ち」があり、娯楽性を高めているが、当方の上記三題話は、「落ち」どころか憤懣ばかり残り、気持ちのほうで、「落ち」込んだうえ、「長幼の序」という言葉もあるのだがなあ〜と、内心嘆息してしまう。

さてよ、この言葉は、「孟子」の言葉で東洋思想だ。どうりで、この国では、西洋思想の「レディファースト」が、東洋思想の「長幼の序」より強いのだ。結論は、女性が来たのに席を譲らなかったお前の方が断然悪い。……すみません。以後気をつけます。^(\_^)

乗客マナーに関しては、日本でも芳しくないのが数多く散見されるが、ここで経験したようなことすべてに、腹を立てていては、胃酸が多く湧き出し胃袋を溶かしてしまうだろう。

スペイン語の諺にいわく、

**「La verdadera paciencia está en aguantar lo inaguantable」**(ラ ベルダデラ パシエンシア エスタ エン



アグアンタール ロ イナグアンタブレ と発音し意味は、「本当の忍耐は耐えがたきを忍ぶにある」というのがある) 日本語の諺ではなんと言うのだろうか？「ならぬ堪忍するが堪忍」あたりか。

私には日本の諺の意味よりも原文に近い意味で、「……朕は時運の趨く所堪へ難きを堪へ忍ひ難きを忍ひ以て万世の爲に太平を開かむと欲す……」を思い出す。昭和天皇陛下の玉音放送(終戦の詔勅)の一節である。今回のタイトルは恐れ多くもその意を汲んだうえ、多分30数年前に流行った、某カレー会社のコマーシャルを思い出して採用したのである。(子どもでなく相当ひねた老人であるが！)

時には不愉快なこと(あるいは認識の相違で、当方だけ不愉快と感じているかもしれない)もあるが、喜びも悲しみも乗せて、今日もメトロブスは市内を快走し、これからも走り続けるだろう。

法定老齢年齢に達しても、すべてが、ならぬ堪忍するが堪忍と達観できない、ボラッチョ・ボニート氏ゆえ、時たま感ずる気分の悪い出来事の鬱憤を老妻に愚痴り、たしなめられながら、今日もまた一人静かに、テキーラの杯を重ねるのであった。(2010年6月3日)